

# 幼児のあそび

## — 児童臨床学の応用 —

大戸美也子



### 問題

子どもにとって、あそびと遊具は不可欠な存在のようである。

あそびの定義や本質が論議され、保育におけるあそびの形態や時間が問題にされ、遊具の種類や数や扱い方に真剣な配慮がはられるのも、あそびと遊具が子どもの世界に深く根をおろし、活用されているからに他ならない。

「人間のことにほんとうに精通した人の、落ちついた、透徹した眼<sup>1</sup>」は、幼稚園のそもそものはじめから、遊戯と恩物を保育の中心に据えてきたし、その後これらの内容が一層子どもにふさわしく変化し発展してきたものの、幼児の世界においてその地位の揺らぐことはなかった。このことはまた、あそびと遊具が人間

(または人間であること)にとっても不可欠な存在であることを意味するものである。幼児は「そのはじめから養護し養育することによって、われわれの文化社会に参加して生活することができるようなパーソナリティーに作られている」<sup>2</sup>のである。

だから、養護する者とされる者の間に意志の疎通がなければ、幼児はたった一人の小さな異邦人と化し、生きていくことすら困難となるだろう。「児童が児童であるとともに、成人する」<sup>3</sup>ことができるのも、子どもと成人の間にあそびという共通理解の場があり、遊具という共通語を持ち得たからではなからうか。

ここに、あそびと遊具が人間にとって必要とする第一の理由がある。次に、人間の初期経験を重視する立場からもあそびと遊具を必要とする理由があげられる。人の成長や発達、ひとつの段階から次の段階へ積み重なっていく過程であり、それぞれの発達

課題はそれに先立つ経験に依存するといわれている。したがって、人間の子どもがよい出発をすることはきわめて大切なことといえよう。そして「子どもが子どもらしく遊びながら、子どもであること」をのりこえていく<sup>4</sup> 事実を見逃してはならない。子どもが、今日あそびの中で充実した時間をすごすことが、明日への最善の備えとなっているのである。

また、人生の初期の段階にたそびと遊具を必要とする理由として、ローレンス・フランクは次のような指摘をしている。

「幼児は、精神衛生からみても負担のかかる試行錯誤を行なっている時期であるから、困難や葛藤につき当たった時助けになるような『教育的治療』が必要である。それはちょうど、前線のかげで精神的あるいは情緒的な戦傷者を扱うように<sup>5</sup> 子どもは、全く自発的にあそびの中で成長の傷の痛みを癒しているのである。

このような理由から、子どもにとつてのたそびの問題が、人間（または人間であること）にかかわってくるといえよう。これは、あそびの単なる拡大解釈というよりは、むしろ、子どもとじかに接する人の次のような役割を認識する時その前提となる考えに依存しているのである。

我々は、子どものあそびを通して対話し、行動の意味と可能性を理解し、さらに可能性を伸ばす方策を考え実践に移さなければならぬ。これはちょうど、診断だけにとどまらず診断「即」治

療を基本とする児童臨床家の立場と共通するものであり、我々が児童臨床家としての役割を担っていることを意味している。

このような役割に気づき「子どもの今ある状況は、発展可能態として、今の社会の変革を推進させるだけでなく、明日の社会における発展創造態としての役割を果たす」という児童観に立つ時、子どもの問題が人間の問題として係りをもってくるのである。

子どもと接する者の新たな役割（児童臨床家）と、そこでの学問（児童臨床学）の成果は幼稚園の中にとり入れられるべき価値のあるものである。

例えば、ジノットによれば、遊具は子どもが自分の情緒的欲求を投影すると同時に、それによって行動を助長する働きのある二つの側面を有するものであり、したがって遊具を慎重に選択すれば、治療家はその場面に内在する可能性を洞察することが可能であるとして、遊戯療法に効果のある遊具と用具の選択に関して理論的な枠組を作る試みをしている。

この提案は、幼稚園の中にも、保育効果をあげるための保育技術や教材の研究の外に、保育場面の研究や、あそびを進展させる遊具の理論的研究のあることを示唆するものであるといえよう。そこで、これらの研究の成果をふまえて行なった保育場面に関する実験研究を次に紹介してみよう。

## 研究

### ○ねらい

保育室で使用頻度の高い遊具または用具七個を選び、遊具の配置差から三つの保育場面を設定し、一定時間子どもをその中で自由に活動させることにより、場面に内在する可能性を

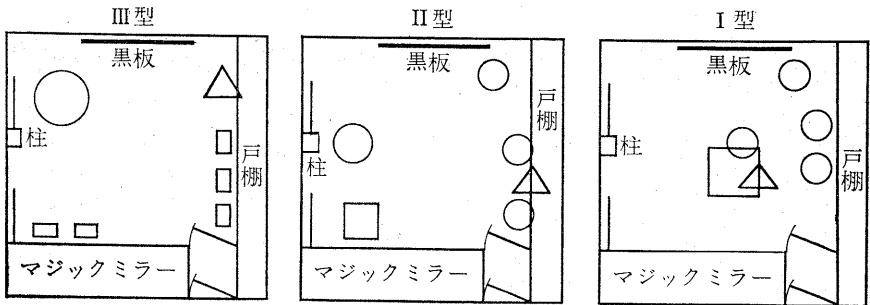
#### (1) 物（遊具）の操作の側面と

#### (2) 対人関係の変化の側面

とから明らかにし、実際の保育に役立てることをねらいとした。

### ○実験計画

保育観察室（74 m<sup>2</sup>、南側…ベランダへ開放、北側…戸棚、東側…マジックミラー、西側…黒板・壁、絨毯敷）において大型箱積木一式、ママゴトセット一式（フレール館製）、（ギギ）（半鬼）一枚、人形三個、椅子二脚、絵本十数冊の遊具または用具について、I、II、IIIの三つの配置差による場面設定をした。□は、積木、○はママゴト道具、△は絵本、I型は箱積木において、集合化を誘発するよう分散させ、しかも子どもの対物活動の自発性をそこなわないよう配置し、ママゴト遊具において核化を誘発するよう関係遊具を一か所に集めて配置し、絵本は比較的静かな場所に集めて配置したもので、全体としては積木が最も流動性の多い配置型である。（Iの図）



□積木 ○ママゴト道具 △絵本

II型は、箱積木において核化を誘発するよう一部作りかけにして配置し、ママゴト遊具については関係遊具を分散させしかも子どもの対物関係の自発性をそこなわないよう配置し、絵本はママゴト遊具と共に並列して配置したもので、全体としてはママゴト遊具が最も流動性をもった配置である。（IIの図）

III型は、箱積木において部屋中央へ入口側を解放的に、反対側を閉鎖的に積み上げて配置し、ママゴト遊具は関係遊具を比較的近距离に分散させて配置し、絵本は積木の間に配置したもので、全体としてはどの遊具も流動性をもった配置である。（IIIの図）

被験者は、耶山女子大学附

属幼稚園園児、年長組三クラス(89名)、年少組一クラス(21名)。記録者は、子ども一人について一人および各遊具について各一人の記録者がつく。観察時間、子どもの入室から各90分間。実験期日 昭和四十二年十月〜昭和四十三年一月の間の午前中。

○結果(その一)

あそび活動の記録をもとに、子どもの対物活動のあり方をみるため次の三つの角度から分析を行なった。

- ① 特定遊具(積木)に対する交渉のあり方Ⅱ対物活動
- ② 遊具の活用過程の変化
- ③ 遊具の選択に関する規準化

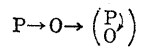
〈分析方法〉

①については、鈴木啓子の分析方法とお茶の水女子大児童集団研究会の「集団活動における物の特性と技法」を参考にした分析基準により、特定遊具に対する行動の動因を幼児(P)における要求と物(O)の特性との関係の中に求め、一分毎に行動を分析し整理した。



A 物が人の物に対する働きかけを規定する(例「積木にのる」「積木にこしかける」「積木からとびおろる」等の活動)

B 物が人の働きかけによって発現する機能・その変化の人の物に対する働きかけを規定する。(例箱積

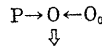


木でトンネルができ、それに誘発されるトンネルをくぐる活動、あるいは、そのトンネルくぐりに誘発されて起こるトンネルを拡大する活動)



C 物が人の働きかけによって発現する機能・その変化に誘われて人の物に対する働きかけを規定する。

(例 他の子どもが作ったトータムタワーに誘発されて、椅子に使っていた積木を怪獣に変え、そのトータムタワーにおそいかかる活動)



D 物が人の働きかけによって発現する変化にさそわれて別の物が加わることによって新しい活動が創造される。(例 トータムタワーをおそった怪獣も加えてさらに高く積木をつみ、神様を作る活動)



E 直接PとOとの交渉はないが、物がそこに存在することによって新しい活動を用意する。(例ピアノをひく台として使っていた積木がそのままになっていたものを次にスベリ台として使うまでの活動)

②については、遊具別に、遊具が活用されている、間接的に活用される、創造的に活用されている、の三つの活用形態を图示し時間を追って整理した。また③については、ママゴトあそびの遊具五つについてその結合状態を②の図に加えて現わした。

〈分析結果〉

①の結果は(表-1)に、②、③の結果は(図-1)に見られる通りである。

### 1、対物活動と配置差との関係

・基準A、遊具に規定される活動は、Ⅲ、Ⅰ、Ⅱ型の順に多い。  
 ・基準Bは、Ⅰ型で、基準CはⅢ型、基準EはⅡ型でそれぞれ多い。  
 ・このことから、積木を配置する際には次のような留意が必要である。

- ・行動が変化するため、一人でも楽しめる配置Ⅲ型、他人がいっしょの方が比較的楽しめる配置Ⅱ型に留意する。
- ・作りかけにしておくこと(Ⅰ型)は、子どもの活動領域を固定化させるが、それを使ってのあそびを規制する傾向がある。

### 2、遊具の活用過程の変化

- ・いずれの遊具においてもⅢ型、Ⅱ型、Ⅰ型、の順に活用の分化が起こる。中でも、積木と絵本において顕著である。
  - ・活動開始後、30分から40分にかけて、物の活用が活発になり、積木の移動や創造的活用あるいはママゴト遊具の結合が起こる。
- (注、新しい場面に入って30分から40分の行動には場からの規定

(表-1) 対物活動と配置差との関係

対物活動の類型	配置型	I	II	III		合計
				年長児	年少児	
A	$O \rightarrow (P_0)$	41	33	61	54	189
B	$P \rightarrow O \rightarrow (P_0)$	17	3	10	14	44
C	$(P_0) \rightarrow (P_0)$	9	3	14	6	32
D	$\bar{P} \rightarrow O \leftarrow O$ ↓	4	3	5	1	13
E	$P \neq O \rightarrow$	19	48	0	15	82
計		90	90	90	90	360

性の強い、試し行動”や”くり返し行動”が多く見られる。これは、次の主体的活動の前提となる単なる試行錯誤ではつまされない重要な活動と思われる、今後の検討が必要である)このことから、幼稚園の朝の30分から40分間のブラブラ活動または探索活動の中に、一日の保育過程を充実させる活動が内在しているといえよう。

### 3、遊具の選択に関する規準化の傾向

- 五つのママゴト遊具間の結合状態から遊具の取捨選択に関する規準化の傾向をみ見うとした。
- ・サークル中心型 初めにサークルを広げ、次にママゴトセット



を加え、人形、ゴザを経過をおってとり入れていく型(Ⅲ型)年長児)

・ゴザ中心型 初めにゴザを広げ次にサークル、ママゴトセットを加えていく型(Ⅰ型)

・サークル、ゴザ分立型 サークルを中心とするものとゴザを中心とするもののママゴトあそびが並立して起こる型(Ⅲ型年少児)

このことから、ままごとあそびにおいては、ゴザ・サークルにより場または領域が先に決められ、次にママゴトセットが選ばれ、さらに年長児は積木、年少児は人形との結合関係が行なわれるようである。しかし、ままごとあそびが経過とともに分化する場合はむしろ、ママゴトセットのみをもって移動し、その後サークルがはこばれるという事例も見られた。したがって、先の三つの型は、あそび開始時に見られる規準化の傾向と限った方が妥当かも知れない。

#### 引用文献

- 1、フレーベル著 荒井武訳「人間の教育」上72 P (岩波書店 昭和39年)
- 2、ローレンス・フランク著 津守真訳「はじめなければ終りよし」(「幼児の教育」第66巻第8号)
- 3、松村康平編「児童理解の方法」(誠信書房 昭和33年)

4、松村康平著「こどもとおもちや」(ベビーブック4 中央公論社 昭和35年)

5、Lawrence, K. Frank & others "Understanding Children's Play" (Columbia University Press, 1952)

6、松村康平著「研究室での研究と現場での研究」(「幼児の教育」第59巻第1号)

7、ジノット著 中村悦子訳「児童集団心理療法」第5章(新書館 昭和40年)

8、3に同じ

9、松村康平監・編「児童臨床学」児童臨床の關係弁証法 38頁(40頁(昭和43年) (郡山女子大学)

### 倉橋惣三選集全四巻発売中

- 第一巻 ☆幼稚園真諦  
☆子供讃歌  
☆フレーベル
- 第二巻 ☆幼稚園雑草
- 第三巻 ☆育ての心  
☆就学前の教育
- 第四巻 ☆保育案  
☆初期の著作

など、第一巻～第三巻以外の、かつての単行本としてまとめられなかった珠玉の論文、随筆、揮毫。

B6判・特製本  
各巻定価700円 発行フレーベル館